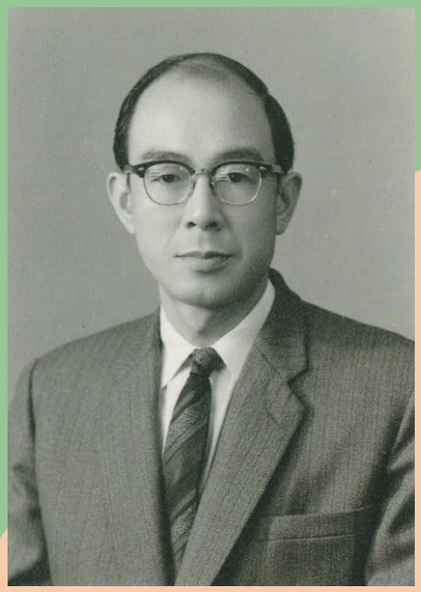
シンポジウム
「昭和」を生きた台湾青年
王育徳
―日本で育まれた台湾の民主化運動―

2019.8.25（日）
13：00-16：00

場所：**山形大学**
小白川キャンパス
人文社会科学部
205教室



参加費：無料

主催：山形大学都市・地域学研究所
共催：日台政策研究所

講演

中澤信幸（山形大学人文社会科学部教授）
　王育徳の台湾語研究の意味
王明理（台湾独立建国聯盟日本本部委員長）
　王育徳と台湾民主化運動

パネルディスカッション

王育徳の台湾語研究・台湾民主化運動等について
振り返り、その歴史的意義について考える。

モデレーター　松尾剛次
（山形大学都市・地域学研究所名誉所長、
日台政策研究所理事長）

シンポジウム

「昭和」を生きた台湾青年　王育徳
―日本で育まれた台湾の民主化運動―

　山形市は台南市と友好都市提携を結びましたが、実際の交流はまだまだこれからです。その交流を深めるためには、お互いの歴史や文化を知ることが重要です。
　台南市出身の偉人として、王育徳（1924～1985）が挙げられます。王は日本統治時代の台湾で教育を受け、その後東京帝国大学に入学しました。戦争のため台湾に戻りましたが、「二二八事件」とその後の恐怖政治をきっかけに、日本に亡命しました。その後は自分の母語である台湾語の研究を進め、苦労の末『台湾語常用語彙』（永和語学社、1957）等のさまざまな著作を出しました。その研究は東京大学に提出した博士学位請求論文『閩音系研究』（1968）に結実しています。
　王は明治大学で教授となった他、いくつもの大学で教鞭を執りました。特に東京外国語大学での台湾語講座は、世界初の台湾語の授業となりました。
　一方、王は1960年に台湾青年社を創設し、台湾独立運動へと邁進していきます。当時の台湾は国民党政権による戒厳令が続き、いまだ民主化してはおりませんでした。王はこのような政治体制からの「独立」、また台湾は中華人民共和国とも異なるという意味での「独立」を主張しました。その活動は現在も台湾独立建国聯盟で継続中です。
　これに加えて、王は台湾人元日本兵士の補償問題にも取り組みました。日本との直接の国交がない中で、王は元兵士たちへの補償を実現すべく尽力し、それがライフワークにもなりました。
　昨年には、王の活動を顕彰した「王育徳記念館」が台南にオープンしました。
　この王の台湾語研究、また台湾独立運動や台湾人元日本兵士の補償問題について知ることで、その背景となった台湾や台南の歴史・言語・文化について考えていきます。

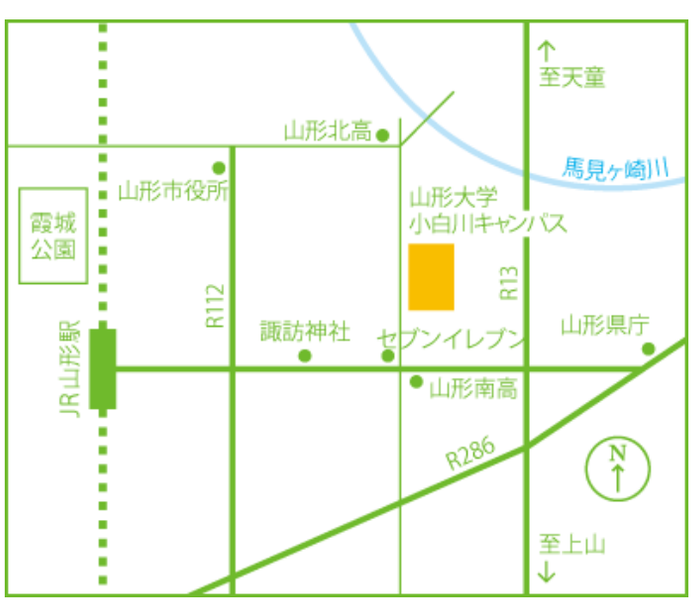
講師の紹介

中澤信幸　Nakazawa Nobuyuki
三重県四日市生まれ。山形大学人文社会科学部教授。山形大学都市・地域学研究所所長。日台政策研究所理事。名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。専門は言語学、日本語音韻史、日本漢字音、中国語音韻史、台湾語など。台湾とは2002～04年に大学の日本語教員として奉職して以来、関わりを持ち続けている。著書は『中近世日本における韻書受容の研究』（おうふう、2013）。また「日本語教育における台湾語音活用と「日台基本漢字」」（『台灣文學研究』8、国立成功大学台湾文学系、2015）、「東方孝義編『台日新辞書』所収語彙の特徴」（『天理臺灣學報』27、2018、共著）等、台湾語に関する論考多数。

王明理　Ō Meiri
東京生まれ。慶應義塾大学文学部英米文学科卒業。台湾独立運動に尽力した父・王育徳の意志を受け継いで、台湾独立建国聯盟日本本部委員長に就任。『王育徳全集』編集委員。著書は詩集『ひきだしが一杯』（創造書房、2003）、翻訳書『本当に「中国は一つ」なのか』（ジョン・J・タシク著、草思社、2005）ほか。編著として王育徳の回想をまとめた『「昭和」を生きた台湾青年　日本に亡命した台湾独立運動者の回想1924-1949』（草思社、2011）。

アクセス

山形大学小白川キャンパス
〒990-8560　山形県山形市小白川町1-4-12
・JR山形駅から
　東方へ約2km（徒歩25分）
　ベニちゃんバス「東くるりん　東原町先回りコース」で「山大前」下車（所要時間約9分）
　市内路線バス「県庁前・県庁北口行き」で「南高前・山大入口」下車（所要時間約6分）、そこから徒歩約7分
・JR仙台駅から
　高速バス「山形行き」で「南高前・山大入口」下車（所要時間約55分）、そこから徒歩約7分



お問い合わせ　日台政策研究所　事務局　中澤信幸
☎023-628-4822 ✉nichitaiken@gmail.com